

氏名	紅桂蘭
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	博甲第 9102 号
学位授与年月	平成 31年 3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	中国における少数民族文化活動に関する研究 ーモンゴル族にみる民族文化と国民統合ー

主査	筑波大学准教授	博士（教育学）	上田 孝典
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	藤井 穂高
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	甲斐 雄一郎
副査	筑波大学准教授	博士（教育学）	佐藤 博志

論文の内容の要旨

紅桂蘭氏の博士學位論文は、中国における少数民族が独自の民族文化を介して国民意識と民族意識の両方が醸成され、「中華民族」という包括的な意識の中で異なる位相において併存していることを、文化をめぐる政策分析や活動実態の調査に基づいて明らかにしたものである。その要旨は以下の通りである。

序章で、著者は少数民族とその文化に関する先行研究を検討し、「民族識別」工作与「中華民族」概念という中国に特有の少数民族政策の特徴を述べている。そのうえで、本論文全体の目的は、国家により公定された「少数民族」と費孝通が提唱する「多元一体構造論」における「中華民族」に包括される少数民族をめぐる構造的な特徴を明らかにすることであると述べている。

第一章では、新中国成立期（1949～1965）、文化大革命期（1966～1976）、改革開放期（1977～2001）、グローバル時代（2002～現在）に時期区分をおこなったうえで、著者は国家、地方、民衆というそれぞれのレベルでの文化政策の実態を明らかにしている。そして国家レベルにおいては、「民族文化の保護」と「国民統合」の2つの目的が併存しながら政策が展開されてきたことを明らかにしている。

第二章では、地方レベルでの実態について官製の民族文化芸術団体であるウランムチを事例にしなが、国家政策の地方への浸透の実態を明らかにし、時々の国策に深く影響を受けながら思想宣伝や商業活動に利用されてきた団員の苦悩をインタビューから明らかにしている。しかし著者は、政策の一翼を担いながらも、ウランムチの上演を通じて民族意識を涵養している側面も意識されていたと述べている。

第三章では、民衆レベルにおいてアンダイ文化を事例にしなが、文化の継承・保存への志向性を考察し、伝承されてきた「伝統アンダイ」が政治的弾圧の中で禁止されるも、伝統アンダイが有する宗教的要素を排除しながら、歌の節回しや踊りの振り付けなどの基本的形態を応用していると

述べ、著者は精神性を保持しながら新しい文化芸術として「新アンダイ」を創造してきたと述べている。このことにより、今日までアンダイ文化が途絶えることなく存続できたというアンダイ創作者の思いをインタビューから明らかにしている。著者は、文化の変容について、変化を拒み政治的圧力や社会的風潮に対抗するだけでなく、むしろ「創造」の営為を通じて伝統文化の精神性を現代に継承することが重要であると述べている。

第四章では、伝統文化が「創造」された事例として、民族学校に導入されているアンダイ体操を事例にとりあげ、児童へのアンケート調査から新アンダイがモンゴル文化として定着していることを実証的に明らかにしている。著者は伝統アンダイの由来や本来の意味についての知識が多くの児童に理解されていないことも述べているが、9割以上の児童が「アンダイ芸術の郷」として有名になることを誇りに感じ、「アンダイはモンゴル族の文化である」「モンゴル族の文化を継承してほしい」と考えており、新アンダイがアンダイ文化として次世代に継承され、定着していることをアンケート結果から明らかにしている。

第五章では以上の考察を踏まえ、費孝通の「多元一体構造」論を検討し、「中華民族」概念の観点から中国の少数民族が有する「民族意識」と「国家意識」の構造分析を行っている。著者は、中国の少数民族が、少数民族としての民族意識を保持しながらも中国人としての国民意識が矛盾せずに併存し、国家統合が図られていると述べている。そして中国においては、民族意識と国民意識の両方を醸成し高める方法として民族文化が位置づけられており、「中華民族」という操作概念の中に民族意識と国民意識が包摂されることで、両者が異なる位相で併存しうる構造にあることを明らかにしている。そして、以上のように中国の民族文化が有する特徴を分析しながら、著者は少数民族が国家の文化的利害と対峙しながら、その時々に応じて柔軟に妥協と適応を繰り返すことで文化継承が果たされていると述べている。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、多民族国家である中国がいかにして国民統合を図っているのかについて、文化の視点から考察した研究である。その際に、中国で定説化されている費孝通の「多元一体構造」論を分析枠組みにしながらか、「中華民族」という操作概念で説明しようとする点に特徴がある。

少数民族の中でモンゴル族のみに焦点を当てていることや、「多元一体構造」論に全面的に依拠していることなど不十分な点はあるものの、文化継承の過程にみられる担い手による文化創造の試みについて、創作者へのインタビューをもとに分析されており、論述の妥当性を補強しているといえる。

国家と民族を単純な二項対立図式に還元せず、文化をめぐる両者の関係性を重層的にとらえ、国民意識と民族意識が「中華民族」という操作概念に包摂され、異なる位相において併存している構造であることを指摘した分析は、先行研究に新たな視点を提示する成果であり高く評価できる。

平成31年1月23日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。